

第279回山口西田読書会(=2021年7月17日開催分)の Protokol

担当:末永

第279回は7月17日(土)に西田旧宅およびZoom上で開催され、まず、佐野先生の Protokol を中心に会が進行した。「場所」論文の第6段落冒頭で提示された自覚概念の定式、「私は自己の中に自己を映すといふ自覚の考から出立して見たいと思ふ。自己の中に自己を映すことが知るといふことの根本的意義であると思ふ」(西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、215頁; cf. 同書、132頁)という定式をベースに「知るといふこと」をめぐって西田が独自の考え方を披歴していく箇所であった。その際、新カント学派の認識論における「形相的構成〔≒知るとは形式によって質料を構成することである〕」という考え方を論敵としつつも、「質料」・「形式/形相」という西洋哲学史上の基本概念を自らも駆使して「知るといふこと」がどういうことであるのかを語り出そうとする西田の一貫した姿勢を支えていたのは、やはり、「自覚の場所性」(上田閑照『上田閑照集』第三巻 場所、75頁)ないし「場所的自覚」(上田閑照『哲学コレクションII 経験と場所』、113頁)という根本思想であったように思われる。

Protokol の報告過程で問題となったのは、西田がここで言う「純なる作用」(西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、216頁)がどういう性質のものであるのか、また、「純なる作用」と「知るもの」(同書、216頁)との関係がどうなっているのかということであった。「純なる作用」について、Protokol に先立って佐野先生が作成された解釈案では、第一に、これを存在論的に力学的作用〔≒質料から運動を見るキーネーシスではなく、形相から活動を見るエネルギー(種から芽が出て葉が生い茂り、花が咲いて実を結ぶという生命の活動そのもののように); 働くものなき働きとしての「真に働くもの」(同書、120頁; cf. 同書、189頁)、「基本なき作用」(同書、120, 200頁)〕として捉える案、第二に、これを認識論的に判断作用(ないし反省作用)〔≒形式によって質料を構成するのではなく、形式が質料を包むことが知ることである以上、そうして出来上がった知られたものとしての質料をさらに形式が包むという仕方で「無限の系列」を成立せしめる働きとしての作用〕として捉える案が提示された。どちらの解釈案も現段階で絶対にこちらだと断定することはできない。また、どちらの解釈案を採用するにしても、ここで言われる「純なる作用」と「知るもの」とは同一ではないという結論に達する。たとえば、第二の解釈案について佐野先生が述べられた「反省〔≒判断〕はなお、自覚ではない」・「反省作用〔≒判断作用〕を内に包むものが自覚である」というコメントが顕著に示すように、この判断作用(ないし反省作用)が自らの外になお質料的なもの、潜在的なものを残している以上、そして「知る」ことがすべてを「内に包む」ことである以上、「〔純なる作用ではなく〕純なる作用をも超越し、此等を内に成立せしめる場所といふ如きもの」(同書、216頁)こそ、西田の言う「知るもの」なのである。

また、第278回読書会で問題になった「包むものと包まれるものとが一と考へられる時、無限の系列といふ如きものが成立する」(同書、215頁の最後の2行)という一文をめぐって、読書会メンバーの楯谷氏が、「ポンチ絵」を使ってご自身の解釈案を分かりやすく説明してくださった。話題は、「知られるもの」=「包まれるもの」=リング①〔≒自己に対して与えられるといふもの=外部情報としてのリング〕+リング③〔≒先づ自己の中に於て与えられねばならぬもの=内部記憶ないし先行観念としてのリング〕+リング②〔≒意識現象=リング①とリング③の総合〕と、「知るもの」=「包むもの」=「場所」〔≒〔≒意識現象を内に成立せしめるもの=人間の脳内〕との、関係のあり様についてであった。楯谷氏の解釈では、認識主体において新たに形成された表象としてのリング②と、認識主体の内に既に存在している観念としてのリング③〔≒認識主体の外から来る客体としてのリング①と実は区別できないかもしれないもの〕とが互いに互いを更新

し合う、その関係性を、西田は「無限の系列」と呼んでいるのではないか。また、リンゴ②とリンゴ③⇨リンゴ①の相互的な更新作用が、西田の言う「純なる作用」であり、人間の頭脳が、この「純なる作用をも超越し、此等を内に成立せしめる場所」ではないかということであった。

【テキスト】

『働くものから見るものへ』、西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、217頁13行目から219頁12行目まで
(=「場所(一)」の第7段落全体)

【テキスト要約】

西田は、われわれの認識〔⇨知識、知るといふこと〕が成立する仕方を考えるにあたり、当時の認識論における「対象、内容、作用」(西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、208頁)の区別を踏襲しつつも、作用を外へと超越する「対象」方向への超越のみならず、作用を内へと超越する「意識の野〔⇨我々が物事を考える時、之を映す如き場所といふ如きもの〕」(同書、210,211,214頁)方向への超越を考えている。その際、西田が手がかりとするのが、プラトン『ティマイオス』で言われたような、「イデヤを受取るもの〔⇨意識現象を内に成立せしめるもの〕」(同書、209頁)としての「場所(コーラ)」という考えである。

「場所」論文の第7段落冒頭では、再び、「私は自己の中に自己を映すといふ自覚の考から出立して見たいと思ふ。自己の中に自己を映すことが知るといふことの根本的意義であると思ふ」という自覚概念の定式、言い換えると、「場所」の認識論的テーゼに言及される。ただし、以下の西田の論述では、「映されるもの／映す場所」という形で、「於てあるもの／於てある場所」の関係へとスポットが当てられていくので、「場所」の存在論的テーゼ、すなわち「有るものは何かに於てなければならぬ、然らざれば有るといふことと無いといふこととの区別ができないのである」(同書、208頁)というテーゼを同時に念頭に置くべき箇所であった。

「場所」を存在論的観点から見た時に問題となる「作用」(同書、217頁)のあり方を考えるにあたって、西田は「映されるものと映す場所との関係」(同書、217頁)に注意を向ける。この「関係に於て」初めて、「作用」なるものが見えてくると考えるからである。その際、「映されるもの」として西田が最終的に考えようとしているのは、「ラスクの所謂対立なき対象」(同書、217頁)、すなわち「超対立的対象」〔⇨「判断内容の真・偽を決定する標準として、それ自体は真偽・主客の対立を超えており、それゆえに判断彼岸的であり、したがって認識を超越している」もの(佐野先生が以前に作成なさった補足資料より引用)〕である。我々の認識を超えてそれ自体で存立する「超対立的対象」とは、西田の言葉で言うと、「全然作用を超越したものと考へられる」「単なる認識対象〔⇨ありのままに映された本体的有としての、於てあるもの〕」(同書、214頁)である。西田が論敵としている新カント学派の一人、ラスクのような考え方を、自らの「場所」概念で説明できるかどうか、ここでの西田の賭け金だったのであろう。結論から言うと、「全然己を空うして、すべてのものを映す意識一般の野ともいふべきもの」(同書、214頁)、「真に自己を空うすることによって、対象をありのままに映すことができる」(同書、221頁)ような「意識の野〔⇨真の無の場所としての、於てある場所〕」を想定することによってのみ、「全然作用を超越したラスクの所謂対立なき対象」をも考えることができる。こうした「真の〔⇨自己無化する〕意識」(同書、220頁)、「真の〔⇨「すべてを包み、すべてを成り立たしめる」(同書、157頁)無の〕場所」(同書、219頁)へと到達すべく、西田は、我々の「認識対象」となりうるものに関して考えられる「有無の関係」(同書、218頁)に即して、順次考察を進めていく(「場所」論の認識論的テーゼと存在論的テーゼを総合的に考えようとする態度?)。

なお、ここでは、論文「内部知覚について」(同書、76-134頁)の内、「何処までも〔判断の〕主語となって述語とはならない」(同書、97頁)ものとしての「アリストテレスの基体といふ如きもの」(同書、5頁)について、西田が述べた事柄が参考になる。とくに、「色の変化」(同書、100頁)をめぐる考察や、「質料〔⇨潜在性、可能態〕・「形相〔⇨現実性、現実態〕」という概念をめぐる、「両者は連続せる一つの作用」(同書、97頁; cf. 同書、218-219頁)であるという考え方が、今回の講読箇所との関連で参考になる。質料と形相を区別しつつも、「現実的形相に対する潜在的質料は、亦一種の形相でなければならぬ。斯く考へることに

よって、アリストートルの云ふ如く形相が働くものと考へられるのである」（同書、119-120 頁）、「質料が潜在的形相として現実的形相とともに一つの作用となる時」（同書、120 頁）と言われるように、質料を形相の位相へと置き移すことによって、言い換えると、質料／形相の区別を潜在性／現実性の区別へと置き換えることによって、「働くもの」のダイナミズムを考えようとする点が、西田の特徴である。

西田はまず、「無いといふものに対して認め」られた「有るといふもの」や「有るといふものに対して認められた無いといふもの」を「対立的有」（同書、218 頁）と呼び、「赤」と「赤ならざるもの」を例に挙げる。どちらも他方に対して「対立的有」であり、また、一方が顕在的有である時は、必ず他方が「潜在的有」（同書、218, 219 頁）であるというように、互いに「相反」（同書、99, 191, 219 頁）・「反対」（同書、190, 192, 197, 218, 219 頁）の関係にある。なお、赤を「有」と考えた場合、「赤ならざるもの」は「有を否定し有に対立する無」（同書、218 頁）に相当するが、西田の考える「真の無」は、「かかる有と無とを包むもの」、「かかる有無の成立する場所」（同書、218 頁）でなければならない。すなわち、どちらも「対立的有」である「赤」と「赤ならざるもの」とが、共に「之に於てあるもの」となるような「有の背景を成すもの」（同書、218 頁）でなければならない。

たしかに、「色」（同書、100, 218 頁）の場合、「物が属性を有つ」と考えたアリストテレスのように、こうした「於てある場所」を「物」（同書、100, 218 頁）と考えることもできなくはない。「物が種々なる性質を有し、前には白といふ性質を取っていたが、後に黒といふ性質を取ったと考へ得る」（同書、100 頁）と西田が述べたように。だが、西田はこの考え方を採用しない。「物の色を赤といふ時、我々はそこに赤といふものを直観するのである。物を離れて赤其者を見るのである」（同書、98 頁）と考える西田にとって、変化するのは「色自身」（同書、100 頁）であって、色がそこに於てあるところの「色以外の何物か」ではないからである。なお、赤が「〔白や黒などの〕赤ならざるもの」との対比で考えられたように、色は「〔音、匂いなどの〕色でないもの」（同書、218 頁）との対比で考えられるが、どちらも他方に対して「対立的有」（同書、218 頁）であり、こちらは互いに「相異」（同書、190, 192, 197 頁）の関係にあると言える。

「働くもの又は働き」（同書、189 頁）について、より正確には「基体なき作用」（同書、120, 121, 200 頁）としての「真に働くもの」（同書、120 頁）について考える際、西田は一貫して、「物」（同書、100, 189, 199, 218 頁）からその運動（キーネーシス）を考えるのではなく、「力」（同書、100, 199, 217 頁）からその変化を、いわば活動そのもの（エネルゲイア）を考えようとする。したがって、まだ厳密な意味では「真に働くもの」〔≒キーネーシス（運動）に対するエネルゲイア（活動）〕とは言えないものの、「潜在より現実に変ずるものは〔……〕色自身でなければならぬ。是に於て力といふ様なものが考へられるのであるが〔……〕現実の色の変化が根本的でなければならぬ。真に内在的な力とは色自身の内面的連続でなければならぬ。形相と質料とが一となったものでなければならぬ。我々はかかる内面的連続の一点を主語として、之について白とか黒とか云い得るのである」（同書、100 頁）と西田が「色といふ性質」について述べたことは、音や匂いなど、すべての「性質的なもの」（同書、99, 101, 102 頁）（「述語的なもの」（同書、5 頁；cf. 同書、97, 99, 100 頁）としてそれ）に当てはまると考えることができよう。「物が何処までも関係に溶かされて行くと考える時、有無〔≒色の場合、赤と赤ならざるもの、音の場合、ある基準音とそれより高い音や低い音〕を含んだものは一つの作用と考へられる」（同書、218 頁）と西田が言う時の「一つの作用」とは、「〔色や音などの〕単なる性質的一般者」（同書、196 頁）ないし「〔限定せられた〕類概念」（同書、118, 219 頁）と表現される「変化の場所」（同書、218 頁）において見られた「変化」（同書、99, 100, 191, 219 頁）のことであろう。この段階で問題になっているのは、以前に出てきた「単なる類概念的統一の対象界」（同書、193, 194 頁）であろう。

しかし、西田の考えでは、こうした「作用に於ては有と無と結合する〔≒ある対立的有と別の対立的有との関係が、潜在有から現実有への変化という仕方でも成り立つ〕が、無が有を包むとは云はれない」（同書、219 頁）。また、この作用がそこに於て見られるところの場所もなお、「或内容を有った場所、限定せられた場所」（同書、219 頁）であって、「すべてを包み、すべてを成り立たしめる」（同書、157 頁）「真の無の場

所」(同書、232頁)とは言えない。「真の場所に於ては、或物はその反対に移り行くのみならず、その矛盾に移り行くことが可能でなければならぬ、[……] 真の場所は単に変化の場所ではなくして生滅〔生成と消滅〕の場所である」(同書、219頁；cf. 同書、190-192頁)。西田によれば、この意味での場所、「真に無なるもの、即ち単に場所といふ如きもの」(同書、219頁；cf. 同書、232頁)において初めて、「真に働くもの」が見えてくる。言い換えると、「基体なき作用」(同書、120, 121, 200頁)としての「純なる作用」(同書、189頁)、「本体なき働き〔としての〕、純なる作用」(同書、218頁)が、ただし、「無限に働くもの〔でありつつもまだ質料的なものを含むものとしての〕、純なる作用」(同書、216頁)が見えてくる。西田がここで言おうとしている「真に働くもの」とは、キーネーシス(運動)に対するエネルギー(活動)であると同時に、デュナミス(可能態)に対するエネルギー(現実態)であるようなもの、要するに、まだどこかで「潜在的有」との関係を残した「純なる作用」であるということになる。

これに対し、西田の考える「真の場所」とは、いわばエンテレケイア(完成された現実態、完全な現実性、可能性を実現してその目的に至っている状態)である。「形式と質料との融合せる〔ラスクの所謂〕対立なき対象」も含めて、まだ「潜在的有」との関係を残しているものを容れる「現実有」(同書、219頁)である。

「〔対象化することのできない〕作用の作用」(同書、97頁)であり、「形式の形式」(同書、213頁)、「形相の形相」(同書、216頁)とも呼ぶべきものである。これこそが、西田の考える「真に純なる作用」(同書、219頁；cf. 同書、157頁)、「質料なき純なる形相」(同書、109頁；cf. 同書、216頁)である。言い換えると、それは、「〔働くもの又は〕働きを内に包むもの」(同書、219頁)という意味での「働かないもの」(同書、157頁)であり、さらに言えば「働くものを見るのではなく、働きを内に包むものを見る」(同書、219頁)ものという意味での「見る」(同書、219頁)もの又は「知るもの」(同書、216頁)である。「変化の場所」が「限定せられた類概念」(同書、220頁；cf. 同書、118, 219頁)と表現されるのに対して、「生滅の場所」としての「真の場所」は、「具体的一般者即ち真の一般概念」(同書、201頁)と言い表すこともできよう。この段階で問題になるのは、以前に出てきた「矛盾的統一の対象界」(同書、193, 194頁)であろう。

【参考文献】

上田閑照『哲学コレクションⅡ 経験と場所』、岩波現代文庫、2007年。
上田閑照『上田閑照集』第三巻 場所、岩波書店、2003年。

*8月7日に加筆修正(末永記)